

# あとがき

4冊目の刊行を終えて

石 隈 利 紀

「科学の芽」賞は、早いもので今年度第9回を数えます。毎年、小学3年生から高校生までのみなさんが、日本はもとより海外の日本人学校からも2,000編を超える作品を寄せてくださっています。そうした応募作品の中から厳正な審査を経て、毎年約20編ほどの作品が選ばれて「科学の芽」賞を受賞しています。

本書の『もっと知りたい!「科学の芽」の世界』は、2年ごとに出版され、今回で4冊目の出版になります。本書には一昨年(2019年)の第7回と昨年(2020年)の第8回の『科学の芽』賞の受賞作を収録しました。児童・生徒のみなさんのみずみずしい感性とふしぎさを追い求める探究心にあふれた作品が集まっています。

本書を読むと、宝石の原石に匹敵する作品に、読後はなるほどと思ったり、感心したり、この先はどんなことに発展するのだろうかと興味をそそられたりします。子どもたちが、こんな視点でまとめるとは、すごいなと感心するし、将来ノーベル賞を取るかもしれないという期待も抱かせるような作品群です。手に取り、子どもたちの科学する心を受けとってほしいと思います。

また、これから、調べて、研究したいと考えている児童・生徒のみなさんには、今の疑問を明らかにするにはどうしたらいいのか、どんなふうに調べるのかなど、研究をしていくためのヒントがたくさん書かれていますから、ぜひ参考にしてほしいと思います。

昨年度の第8回「科学の芽」賞の授賞式では、たいへんうれしい出会いがありました。第1回の受賞者と第6回の受賞者が出席してくれたのです。第1回の受賞者は、現在は東京のテレビ局に勤務ですが、「科学の芽」賞を受けたことで、「ふしぎだと思う心や、どうしてだろうか」という気持ちにより磨きがかかり、今も自分の仕事の中で生きていますとお話をされていました。また第6回の受賞者は、現在は筑波大学の生命環境の領域で勉学をしている学生でした。高校時代に「科学の芽」賞に出会って、自分の行くべき指針が見えて、生命について深く調べていきたいと進路を選択したとのことでした。

今回、過去の受賞者の話を聞き、科学の道を探究する仕事につく人もいますし、全く違う職業を選ぶ人もいますが、「科学の芽」がその人の中にしっかりと生きていることを知り、感銘を受けました。私は小学生のころは野口英雄の本を読んで科学者になりたいと思い、高校生のころは弁護士にあこがれました。現在は心理学やカウンセリングの研究をしています。今でもだれかの役に立ちたいという思いを持ちながら、ふしぎだと思ふことは調べるという習慣を守っています。

「科学の芽」賞は、筑波大学が社会貢献の意味も含めて朝永振一郎先生の生誕100周年を記念して作られました。朝永先生のいわれた「科学の芽」が、全国のさまざまなところで、茎を伸ばし、花が開き始めていることをうれしく思います。

今回は日本語版ですが、来年度は10周年を迎えることもあり、英語版の出版の話も出ています。科学に興味を持って学ぶ子どもたちが少しでも増えてくれることを今後とも願っています。本書が、そのために少しでも貢献できることがあればこんなにうれしいことはありません。

[[「科学の芽」賞実行委員会委員長]